

蝦夷地警備で会津藩士が見たであろう北辺の蜃気楼

北海道・東北蜃気楼研究会 星弘之

1. はじめに

江戸時代蝦夷地をロシア帝国の侵略から防ぐため、幕府の命により東北諸藩が警備に当たった。海防の専門家であった松浦武四郎が1846年小樽沖で「高島おぼけ=上位蜃気楼」を見た『西蝦夷日誌』にある。(以降上位蜃気楼を蜃気楼と記す)

松浦武四郎は会津藩士一ノ瀬紀一郎、^{図1}南摩綱紀、^{図2}秋月悌次郎の三人と親交があった、この三人は後に会津藩が蝦夷地警備に当たった標津代官や斜里代官を務めて赴任する際にも、武四郎から蝦夷地に関する情報を得ていたと推測される、摩訶不思議な蜃気楼の話が出て不思議では無い。

北海道は通年多くの場所で蜃気楼の発生が多数確認されており、私自身も図3のように多くの場所で観測・撮影している。

警備に当たった会津藩士も蜃気楼を見たかもしれないとの想いが募り、図4にある警備地の標津、斜里、紋別を調査した。



図1 南摩綱紀



図2 秋月悌次郎

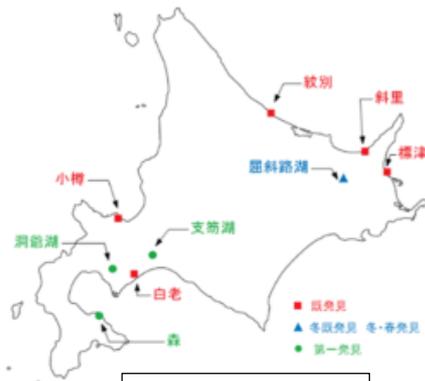


図3 蜃気楼観測・撮影



図4 会津藩警備地

2. 蝦夷地警備の発端と会津藩

現在の北海道松前町に居所を置いた松前藩は1604年にアイヌとの交易独占権を認可され、それ以降、支配を強め蝦夷(北海道)や北蝦夷(サハリン)、国後、択捉などに陣屋を置き、他の藩のように米による禄高ではなく漁場を開拓してそれに代わる財政基盤をつくりあげた。

ロシア帝国は17世紀から20世紀にかけて、領土の拡大を目指して南方へ進出、蝦夷(北海道)、北蝦夷(サハリン)、国後、択捉の陣屋などを襲撃、略奪や拉致が起こった。そのため江戸幕府が蝦夷地警備の必要性を強く持ち、東北諸藩に命じ警備にあたらせたことに始まる。

第二次北方警備では1859年に会津、仙台、津軽、盛岡、秋田、庄内藩に蝦夷地警備命令が下り、会津藩は標津、斜里、紋別が警備地に本陣屋を標津、出張陣屋を斜里、紋別に置いた。

3. 会津藩警備地の現在状況

標津、斜里、紋別とも陣屋は現存していないが文献の記載や現地に形跡が残っているところもある。見張所は広範囲に敵が良く見える小高い所に設けるのが定石で、守るにも最適な場所を選ぶであろう。

現地を確認すると、現在の地形と異なるが海を見渡せる位置にあり近くには高台があるため見張りには最適の場所のように思えた。当時の陣屋等の普請に当たった藩士も同様に思っただろう。

(1) 標津陣本屋跡(図5)

海岸線から陣屋まで約150m、標高約8.5m、陣屋正面は根室海峡で国後島が間近に見える。

(2)斜里出張陣屋跡(図6)

標高9mの小高い丘から海側に約180mと推定、高台に登ると網走から知床半島まで広範囲に見える。

(3)紋別出張陣屋跡

あったとされる現在の弁天町は海岸に近いが周囲は建物に囲まれ当時を忍ぶものはない。



図5 標津本陣屋跡



図6 斜里出張陣屋跡

4. 蜃気楼観測・撮影実績

(1)斜里：年間を通して蜃気楼の発生が確認されていて多彩で多様な蜃気楼が見られる、特に「幻氷」が有名で流氷が見られる北半球最南の網走湾を中心に発生する世界的にも非常に珍しいもの。

(2)標津：根室海峡に面しており、蜃気楼の発生情報も多く、四角い太陽を撮影できる場所として全国的に有名で多くのカメラマンを集める。

(3)紋別：オホーツク海に面していて蜃気楼情報も多く、冬期間は流氷があり蜃気楼や幻氷を見ることが出来る。更に条件が良ければ100km以上離れた知床半島の蜃気楼が見える可能性がある。

5. 会津藩士は蜃気楼を見たか?

標津町、斜里町、紋別市の図書館などで文献などを調査したが蜃気楼の記述は確認されなかった。

警備地の見張所で見張番をしている者は日中、常に海上を見ているので風景の変化に気づきやすい。陸地についても近景の一部死角となる部分はあるものの遠景は問題なく見ることが出来る。

富山湾ではシーズン中多くの観測者がおられ観測回数も多いがオホーツク沿岸で蜃気楼の常時観測者はほとんどいない、たまたま海に行ったら出ていた、海岸道路を走っていたら見えた。このような状況の中でも多くの観測事例があるので警備で常時監視していたのなら相当の頻度で見つかったはずである。

懸念されることは蜃気楼に対する知見がない見張人が「変なものを見た」と報告後、別人が確認したところ何もなくなくなっていた場合、見張人の資質が問われかねないので単なる風景の変化では報告も記録もされなかったかもしれない。

以上のことから、**会津藩士は標津、斜里、紋別に於いて蜃気楼をみた可能性は大だと推定する。**

6. 終わりに

会津藩の蝦夷地警備の顛末が記され、標津町民が所有、町に寄贈した「^{※1}御陣屋御造営日記」のように後日、偶然に見つかりその当時の様子が分かる重要なものになったものもある。今後、蜃気楼の文言が記された文献が見つかることを切に願う。

※1：蝦夷警備命令から標津陣屋造営（1859～1861）までを会津藩御普請方鈴木平八が詳細に書き残したものの主な参考文献等

- ・小樽市 HP <https://www.city.otaru.lg.jp/docs/2020111400276/>
- ・榎本 守恵 『北海道の歴史』北海道新聞社
- ・中村 恵子 『江戸幕府の北方防衛』株式会社ハート出版
- ・平出美穂子 『知られざる幕末会津藩』歴史春秋社
- ・北海道標津町郷土史研究会 『東蝦夷地シベツと会津藩』